



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第一九三号〜

冬至 とうじ 十二月二十二日

松下社の榊卷

そろそろお正月の準備に取り掛かる方も多いかと思えます。伊勢地方の注連縄しめなわといえは、伊勢市二見町の松下社の「蘇民将来」の伝説に由来する「蘇民将来子孫家門」の木札がよく知られています。注連縄に結び付ける木札は、昔は桃の木で作っていたことから「桃符ももふ」、または「門符」と呼ばれます。松下地区の氏神さんでもある神社では、毎年十二月十六日に神社の総代をはじめ氏子が集まり、門符の頒布始祭はんぷはじまつりが行われ、門符のついた注連縄が頒布されるのが恒例となっています。

そしてこの松下社では、もう一つの年末の行事があります。榊卷神事さかきまきかみことです。松下社へお参りされた方は目にしたことがあるのではないのでしょうか。社殿の床下や鳥居の両側、山神などに置かれた榊の束を。あれを「榊卷」と呼びます。

毎年、年末に氏子が集まり、境内を掃除して、注連縄を張り替え、そして榊卷に取り掛かります。青々とした榊の枝をすでに枯れている榊の枝の回りに重ね、縄で束ねるのです。

これは、松下社の社殿が二十年ごとに建て替えられるのに合わせて行われています。遷座せんざの年にまったく新しいものに変えられ、そこから一年ごとに榊の枝が巻き重ねられるのです。前回の遷座は平成七年（一九九五）に行われましたから、今年は十九年目。榊巻もずいぶんと重ねられ、大きくなりました。今では大人が四人がかりで縄を巻いているといっています。

榊巻は境内の十四ヶ所があり、この地方でも珍しい習わしです。樹齢千年といわれる大楠が茂る古い神社で続く榊巻の神事。清浄な地に依代を立てて、神さまの降臨を仰いだという古代の祭祀をほうふつとさせます。それを、二十年ごとの遷座と合わせて行うことに、伊勢らしさを感じるのです。

文 千種清美

